

## 優秀賞

### 『白亜のマイホーム』

宮のふみ

祖父は明らかにいきいきとしていた。ずいぶん前に引退したとはいえ、腕のいい左官職人だった。後輩だった誠さんがしこたま飲んだ時に、「金ゴテの哲」という祖父が家族にも言ったことがないあだ名を、笑いながら明かしたことがある。昭和の団地建設ラッシュでは、北から南まで、全国の団地建設現場を渡り歩き、団地の外壁を塗りに塗りまくったという武勇伝は、耳にたこができるほど聞かされていた。

「で、色は何色にしたいんだ？」祖父の問いかけには圧がある。緊張の面持ちで早苗が答える。「あの、えっと、高貴で滑らかな白亜って感じの白い色がいいんです。広がりがあったどこまでも続くような白。特に東側の大壁はわが家のシンボルになるステキな壁なのでこだわりがあります。」早苗が頬を紅潮させて、時につかえながら答える。早苗の答えに、祖父は大変愉快そうに大声で笑う。「ははは！そうか！で、模様はどうしたいんだ？」「あの、でこぼこのない平らかな白い壁、ここから物語が始まるってワクワクするような、存在感のある壁が憧れなので、模様じゃなくて、滑らかで思わず頬ずりしたくなったり、触りたくなるようなのがいいです。」答える早苗はまるで少女のようだ。憧れが前面に出て夢見がちな表情に見える。それもそうだろう。マイホーム建設は早苗の、そして僕たちの大きな夢だったからだ。

早苗は母子家庭で苦勞して育った。2DKの古いアパートに母と弟と三人で、18年間暮らした。自分の部屋はなく、家へ友達を呼ぶこともなかった早苗は、マイホームへの憧れが人一倍強かった。高校卒業とともに就職し、寮暮らしとなった早苗は、不動産賃貸業の営業として働き、つましく貯蓄をする暮らしを日々積み重ねていた。

結婚を意識し始めたころ、早苗が描いた将来のマイホームの絵を偶然見てしまったことがある。あわてて隠す早苗に、そのテーマパークから抜け出てきたような、絵本の中の白亜のお城風の家をからかったところ、「大ちゃんには、マイホームに憧れる気持ちは分からないよ…」と泣かれてしまった。それ以来、早苗の母を呼び寄せてのマイホーム建設は、未来へ寄り添う二人の共通の夢になっていった。

とはいえ、結婚してあくせくと共働きを続ける僕たちにとって、マイホームは大変大きな買い物で、予算と夢の擦り付け作業は大変なものだった。あきらめなければいけないことと、あきらめきれない夢と、それは苦しい取捨選択の連続だった。でも僕は、早苗が憧れ

続けた白亜の壁だけはあきらめる訳にはいかなかった。どうしたら早苗の描くイメージどおりの白い壁ができるのか、建材や工法を調べる日々が続き、一つの結論にたどり着いた。そして僕は、あるずるい考えを持って、久しぶりに祖父を訪ねた。「マイホームは、モルタル外壁にしたいのだ。」と言うために。引退して久しいはずの「金ゴテの哲」は、面白いほど僕の計算通りに「モルタル外壁」という言葉へとぐいぐい喰いついてきた。そして、「マイホーム建設の大工工事が終わったら、オレがそのあとを引き継ぐ。モルタルの壁はオレが塗ってやる！」という祖父の熱い約束を取り付けた。材料費のみの支給で。手間賃は、日々の弁当代と、作業あとの晩酌代のみというありがたい孫限定特別枠条件で。

僕は初めて祖父の作業を間近で見ることになった。日ごろパンツ一丁でうろつき、昼間からビールを飲んでいる祖父とは別人、「金ゴテの哲」が確かにそこにいた。颯爽とした身のこなし、引退しているのがもったいないくらいのコテさばきは、惚れ惚れするものだった。日々のお茶出しや弁当出しをかいがいしく世話する早苗も、尊敬のまなざしで祖父を見、日々塗り増していく壁を愛おしそうに眺めた。

かくして、白亜のマイホームは出来上がった。完成の日、早苗はもちろん、呼び寄せた早苗の母も駆けつけた僕の父母も、感激のあまり涙したくらい、その出来栄えは素晴らしいものだった。滑らかな白亜の大壁は、晴れた日には青空にどこまでも映えてその高貴な美しさを存分に輝かせ、雨や風の日には、堅固な城壁のように僕たちを包み護るであろうと確信した。「金ゴテの哲」の仕事は確かで、無口で武骨でありながら、大きな愛が込められたのを感じることができた。

マイホームでの暮らしはなかなか良いものだ。早苗の母が僕の両親と祖父を招待して、賑やかな週末になることが多くなった。「金ゴテの哲」はビールを飲みながら満足そうにテラスで白い壁を撫でている。嬉しいことに、この春、ここに新しいメンバーが加わることになった。少し大きくなってきたお腹を撫でながら、優しい微笑みを浮かべる早苗に、小春日和の暖かな日差しがふりそそいでいる。